

二〇二二年度大会の概況

日本思想史学会二〇二二年度大会は、十一月六日（土）、七日（日）の両日、慶應義塾大学を配信元としてオンライン上で開催された。

第一日目は「進化・宗教・国家」をテーマにシンポジウムが開催され一般にも公開された。

報告

ダーウィン、仏教、神—近代日本の進化論と宗教—

（東北大学）クリントン・ゴダール

明治国家と「優勝劣敗」の思想—加藤弘之における国家と宗教をめぐって—

（筑波大学）田中友香理

近代日本における「天」の思想とその行方—中村正直の試みを中心に—

（延世大学）李 セボン

コメンテーター（ディスカッサント）

（佛教大学）大谷 栄一

（広島大学）奈良 勝司

司 会

（立教大学）松田宏一郎

シンポジウム終了後に総会が行われ、評議員より二〇二〇年度事業報告および決算報告がなされ、それぞれ承認された。続いて二〇二二年度事業計画および予算案が提出され、原案通り決定された。

また総会では、選考委員会を代表して荻部直会長から、第十五回日本思想史学会奨励賞の報告があった。受賞作は左の通りである。

【論文部門】

渡勇輝「近代神道史のなかの「神道私見論争」—国民的

「神道」論の出現—」（『日本思想史学』第五二号）

【書籍部門】

石原和「『ぞめき』の時空間と如来教—近世後期の救済

論的転回—」（法藏館）

西田彰一「躍動する「国体」—寛克彦の思想と活動—」

（ミネルヴァ書房）

松川雅信「儒教儀礼と近世日本社会—闇齋学派の『家

礼』実践—」（勉誠出版）

なお、懇親会は開催されなかった。

第二日目の研究発表の題目と報告者は左の通りである。

〈第一部会〉

研究発表

1、津軽安東氏・第六天魔王始祖説の形成―近世前期北奥における中世神話の展開―
(池坊短期大学) 星 優也

2、「正直」から「神道」へ―雛追神事批判から見る吉見幸和の祭政論―
(東北大学大学院) 城所 喬男

3、天保改革のいわゆる「出版奨励」をめぐる思想
(岩手大学) 中村 安宏

4、近世前期の「水土」論の特質
(日本学術振興会) 石橋 賢太

5、五井持軒・三宅石庵『論語問書』論―一八世紀初頭大坂儒学史再考―
(大阪大学大学院) 張 茜
(なお張会員の大会当日の発表は、再入国手続きに伴うPCR検査のため行われなかった。)

6、平田篤胤の大和魂―国学的人間規範としての武の展開―
(東北大学大学院) 増田 友哉

7、「除奸」と「殉難」の間―水戸学者・豊田天功と吉田松陰における楊継盛受容―
(東京大学大学院) 廖 嘉祈

〈第二部会〉

研究発表

1、乃木劇における「儀表」と「人間」の相克―真山青果の戯曲を中心として―
(大阪大学大学院) 平尾 湫太

2、明治後期における社会学者の国際社会論―建部逯吾『戦争論』を中心に―
(関西学院大学) 猪原 透

3、修養論から捉えられたイエーリング―明治三十二年の第一高等学校『校友会雑誌』の一論文をめぐる―
(東京大学大学院) 高原 智史

4、安藤劉太郎とキリスト教―樋口龍温の思想的影響をめぐる―
(京都女子大学) 狭間 芳樹

5、吉満義彦の「新しいヒューマニズム」―三木清の人間学と比較して―
(東北大学大学院) 保泉 空

6、平泉澄と唯物史観―明治維新をめぐる―
(皇學館大学大学院) 谷口 太一

7、思想の再建に向けた知識人の協働の一事例―二十世紀研究所の戦後啓発活動の掘り起こしから―
(東京都立大学) 庄司 武史

〈第三部会〉

公募パネル

題目「近現代の皇位継承をめぐる思想史的諸問題」

一八四八年改正オランダ王国憲法における王位継承条文
の訳出
（中央大学）大川 真

国学者の律令研究と女性・女系天皇―継嗣令の解釈を中
心に―
（神戸大学）齋藤 公太

憲法学の議論における女性天皇と「伝統」
（国士館大学）成瀬トーマス誠
（中央大学）大川 真
司 会

新入会員(前号掲載分以降・敬称略)

氏名 所属等(専門分野)

虞 安嵩 東北大学大学院(日本東北地方の近世儒学教育思想)

木村悠之介 東京大学大学院(近代神道における学知と日本宗教論)

船勢 肇 長崎女子短期大学(近現代日本の大学自治論)

西田 洋子 川崎医療福祉大学(若年女性の瘦身願望と文化的要因)

ナシメント ジュリオ 東北大学大学院(近代仏教史・在家仏教史)

鐘 以江 東京大学東洋文化研究所(神道・裏日本・空間的思想)

小糸 咲月 一橋大学大学院(土田杏村の執筆実践と同時代的意義)

中井 悠貴 立命館大学大学院(「八紘一字」理念と「世界性」)

三輪 拓也 佛敎大学大学院(日本近現代史、政治哲学、社会思想)

田中 俊亮 日本思想史研究会(京都)(前期水戸学)

西澤 忠志 立命館大学大学院(明治期の芸術としての音楽観の誕生)

玉置 文弥 東京工業大学大学院(アジア主義・超国家主義と宗教)

品治 佑吉 立敎大学(近現代日本思想史のなかの社会学)

山口 一樹 立命館大学衣笠総合研究機構(近代日本における戦死をめぐる思想)

金子 昭 天理大学附属おやさと研究所(日本の民衆思想・民衆宗教史)

龔 穎 山東大学(日本における朱子学の受容と変容)

李 嘉棣 大阪大学大学院(帝国日本の総力戦構想と中国)

柳 愛林 東京大学社会科学研究所(近代日本における西洋思想の受容)

小谷 恰央 明治大学大学院(亡命した近代日本知識人の思想変化)

【『日本思想史学』編集・公開規定】

- 一、日本思想史学会（以下、本学会）の学会誌は『日本思想史学』（以下、本誌）と称する。
- 二、本誌の編集には本学会の編集委員会があたる。
- 三、本誌各号の投稿論文に関する規程（「投稿規程」）は、各号ごとに編集委員会が定め、前号に掲載する。
- 四、本誌は、年に一回、毎年九月三〇日に発行する。
- 五、第五一号以降の本誌に掲載される記事の著作権は、それが掲載号発行の時点で本学会の会員資格を有する者の著作物である場合、本学会に帰属するものとする。
- 六、第五一号以降の本誌への非会員の寄稿については、編集委員会が、寄稿の際に、寄稿者から、電子公開の許諾等を得るものとする。
- 七、第五一号以降の本誌に掲載される記事は、発行翌年の一〇月一日に、本学会ホームページで電子公開する。
- 八、本誌第一〜五〇号に掲載された記事の公開許諾については、別途定める。

【投稿規程】

『日本思想史学』第55号掲載論文の投稿を、左記の要領にて受け付けます。

- 一、応募資格
本会会員であること。ただし第54号に論文が掲載された者は、応募資格を持たない。また二〇二二年度（二〇二二年一〇月〜二〇二三年九月）分の会費を納めていない者の投稿は受け付けない。

- 二、内 容
日本思想史学に関するもの。

- 三、書式・分量
・投稿論文の書式・分量は、A4判を横向きに使用し、縦書きで縦四〇字×横三〇行、文字の大きさは一〇・五ポイントとし、注を含めて、一七枚以内とする。下部中央にページ番号を入れること。
・注は文末注とし、本文と同じ書式とすること。脚注機能を使用する場合は、注の行間が自動的に詰められることがあるので、本文と同じ縦四〇字×横三〇行の書式に直すこと（行を詰めたり、ポイントを下げたりしないこと）。

・図・表等は、学会誌の判型（A5判）の用紙に印刷して、本文に添付すること（ただし、図・表等に充てる頁数に相当する文字数の分だけ本文の分量を減らすこと。学会誌の書式は、一頁あたり、二六字×二二行×二段である）。

- 四、提出物
以下の①〜③を電子メールの添付ファイルで提出すること（郵送は不要）。

- ① 投稿論文（PDFデータ）。
- ② 八〇〇字以内の論文要旨（PDFデータ）。
- ③ 論文および投稿者情報（PDFデータ）。日本語および英語の論文タイトル、氏名およびそのロー

マ字表記、所属、職名、住所、メールアドレスを記載したもの。

論文採用時にはあらためてテキストデータの提出を求める。

五、投稿締切 二〇二三年二月二八日一七時。

六、送付先

日本思想史学会事務局 (ajih.jimukyoku@gmail.com) 受信後おおむね一両日中に、事務局より受信確認の返信が送られる。三月三日まで待っても返信がない場合は、メール事故の可能性が考えられるので、あらためて事務局に問い合わせること。

*完成原稿で提出してください。なお紙媒体での投稿原稿は受理も返却もしません。

*論文の審査と採否決定には、編集委員会があたります。

*本誌に掲載された論文等の著作権は、本会に属します。

*なお『日本思想史学』第54号掲載の『日本思想史学』編集・公開規定」も、参照下さい。

【編集後記】

本号には、二〇二一年度大会シンポジウムの「特集」、第七回「思想史の対話」研究会にもとづく「特別掲載」のほか、「提言」「投稿論文」「書評」を掲載しました。

「投稿論文」の総投稿数は一七本（古代一本、中世〇本、近世七本、近現代九本）で、そのうち六本を掲載いたしました。近現代の投稿が多いのは近年の傾向ですが、とくに今回は、中世を対象とする投稿論文がなく、残念でした。二〇二一年度大会も、二〇二〇年度大会と同様に、オンライン開催となり、二日目の研究発表の発表者には、事前に原稿を用意していただいた上で報告していただきました。その成果を投稿された方が多かつたようで、総投稿数自体は昨年度より五本減少したものの、それでも例年より多い傾向は変わりませんでした。書式などの面で投稿規程に違反している原稿が、今回も三本ありました。近年では減少傾向が続いていますが、次号に投稿なさる会員は、くれぐれも投稿規程や編集・公開規定を熟読の上でお願いいたします。

「書評」で取り上げる対象は、二〇二一年三月から二〇二二年二月の間に刊行された会員の著作から選びました。依頼した方々の多くが締切を守り原稿を提出して下さいました。深く御礼申し上げます。

前号の「編集後記」でも書きましたが、依然として新型コロナウイルス感染症の拡大は続き、収束の気配がありません。無事に本誌の刊行に至りましたのは、印刷所をはじめ、関係各位のご協力の賜物かと思えます。篤く御礼申し上げます。

今回も委員各位が委員長をきちんと支えてくれたおかげで、大過なく任期を終えることができます。委員長を務めることで、編集に関わる様々な課題を認識しましたが、十分な改革はできませんでした。次期の委員長にしっかりと引継ぎをしたいと思います。

(K)